

リカードウの新機械論再考（下）
—マカァロクとの往復書簡の検討を中心として—

中山孝男

愛知東邦大学

リカードウの新機械論再考（下） —マカアロクとの往復書簡の検討を中心として—

中山孝男

目次

1. はじめに
2. 『原理』第3版出版以前のリカードウ—マカアロク往復書簡の検討
3. 『原理』第3版出版直前の事情 (以上、前号)
4. 『原理』第3版出版以降の往復書簡の検討
5. むすび

4. 『原理』第3版出版以降の往復書簡の検討

前節で扱った時期の後、リカードウとマカアロクとの間でやりとりされた書簡の中で機械論に関して注目しておくべき最初のものは、1821年4月2日付けリカードウ宛てのマカアロクのそれである。その末尾でマカアロクは、「機械と蓄積にかんする私の論文の刷りを数日中に送りましょう——それがいかなる知識をもあなたに伝えるものでないことはよく知っています。がそれがシスモンディやマルサス諸氏の有毒な妙薬、それ以外の呼びようはありえませんが、の影響をうち消すよい効果をもっていることを望みます」¹⁾と伝えている。こうして前節で紹介したマカアロクの「機械論」論文が、ようやくリカードウのもとへ送られることになったのである。ここで、マカアロクが「シスモンディやマルサス諸氏の有毒な妙薬」とよんでいる見解には、機械採用が労働需要を減少させるということも含まれる。繰り返しになるが、この見解は、以前マカアロクが書いた「課税と穀物法」論文において好意的に紹介したバートンの主張に沿うものであり、その時はリカードウから批判されたものである。そのような見解に対して今回の「機械論」論文においては、マカアロクは反対の立場から論じた。すなわち以前のリカードウの見解に沿う立場から機械論を展開したのであった。

さて、上の書簡にたいするリカードウからの返信には非常に重要な内容がいくつか含まれている。それは次のようにはじまる。「トレنز大佐があなたの蓄積と機械使用の効果にかんする論文を送ってくれました、あのなかには私の現在の見解とうまく一致しない部分もありますが、たいへんよい出来栄だと思います。私はいつかの手紙で機械の利益にかんする私の考えの変化について、また私の本の新しい版ではこの問題にかんし一章を設けたい意向である旨を、お報せし

たと思います」²⁾。この引用文によれば、トレンズ大佐が送ってくれたマカアロクの「機械論」論文には、この時点ではすでに機械の利益にかんして考えが変わってしまったリカードウの「現在の見解とうまく一致しない部分もある」。これについては前節で見たとおりである。にもかかわらず、リカードウはマカアロクの「機械論」論文が「たいへんよい出来栄えだと思」うと書いているのは、その他の部分の内容を評価してのことにちがいない。ところで、リカードウは「機械の利益にかんする私の考えの変化について」、および「私の本の新しい版〔すなわち『原理』第3版……引用者〕ではこの問題にかんして一章〔第31章……引用者〕を設けたい意向である」ことを、すでにもうマカアロクに報せたものと考えていたようであるが、これは彼の勘違いであった。というのは、次にみるマカアロクからの返信で明らかのように、実際はマカアロクには伝えられていなかったことがわかるからである。上の引用文に続いて、リカードウは「先週マリ氏に〔新著の……引用者〕一本をあなたに謹呈するように頼んでおきましたので、いまごろまでにはおそらくその章をお読みくださっていると思いますから、ここで私の意見をのべるにはおよばないでしょう——私が思いきって書いたあの意見の正しさをあなたに十分納得していただけたかどうかお聞かせくだされば幸いです」³⁾と、まだ一般に販売される前の「前渡し本」⁴⁾を出版者のマリ氏からマカアロクに送付するよう指示したことを伝えている。

リカードウが機械使用の労働需要に及ぼす影響にかんする考えを少し前に変えたことを報されることなく、以前のリカードウの見解に沿った論旨を含む「機械論」論文をリカードウに送り、リカードウからは新しい「機械の利益にかんする」考えを表明した章を含む『原理』第3版を受け取ったマカアロクは、1821年6月5日付けの書簡で次のように書いている。「偉大な高著第3版の貴重な贈物にたいする衷心からの返礼がたいへん遅れたことをお詫びしなければなりません——高著の成功をお慶び申し上げます——それはこの重要な科学に払われている注目がいまや益々増大していることを明らかにしうるもっともよい証拠です。またそれは正しい原理の普及を推し進める点で有力な効果をもつにちがいありません」⁵⁾と、まずは丁寧なお礼と賛辞で書き始められている。しかし、前節で述べたようにマカアロクが約1年前に書いた「課税と穀物法」論文をリカードウから批判されたので、「機械論」論文において機械と労働需要にかんする見解を変更したにもかかわらず、今やリカードウ自身が見解を翻し以前とは全く反対の主張（マカアロクが以前に「課税と穀物法」論文で展開した主張）を、リカードウが新著に新しく追加した章で展開している事態を知ったマカアロクは、舌鋒鋭く次のように書き続けている。「同時に卑見では（これはわが師として尊敬することを常に誇りとしている人と大きく異なることをまことに遺憾に思いながら申すのです）この版の機械の章はかの著作の価値からの非常に重大なマイナスであると申さねばなりません——マルサス氏の論議にたいするあなたの勝利にみちた応酬を読んだあと、あなたがそのように早々に彼と握手を交わし、すべての論点を放棄なさろうとはよもや期待しませんでした」⁶⁾と、最大限の悔しさを表明しているのである。ここで、マカアロクが言わんとしていることは、先に読ませてもらったリカードウの『マルサス評注』では諸々の論点においてマルサスの議論の問題点がことごとく明らかにされ、リカードウが主張する論理の「勝利」

を喜んでいたのに、「この版の機械の章」でのリカードウの主張はマルサスのそれに同調するものであるとマカアロクには思われたので、彼としてはこの章は新版にとって「非常に重大なマイナスである」と言わざるをえない、ということである。つまり、『原理』第3版第31章「機械について」の内容は、基本的にマルサスの主張と同じであり、したがって誤りである、とマカアロクはリカードウを批判しているのである。言うまでもなく、「以前の意見の誤りを確信なさった時点でそれらを放棄なさったというのはたしかに当然なことでした。しかし……あなたが公式な自説の取消しをなさることが必要であったとはすこしも考えません」⁷⁾。マカアロクによれば、自説の誤りを発見したならばそれを放棄するのは当然ではあるが、リカードウが以前主張していた中にそのような取消しをしなければならないという必要性は見出せなかった、と総論的にリカードウを批判した後、「機械について」の章で述べられているいくつかの点について質問を投げかけている。

マカアロクはまず、「この問題の考察にあたって多少とも関心をいただくのは総生産物もしくは純生産物の大小ということではなく、単純に機械が商品を安く生産するかしないかということではないのですか？ もし機械が商品をより安く生産しないならば、それは建造されないでしょう、またもしそれが商品をより安く生産するならば、その建造はあらゆる階級の人々にとって利益となるはずです」⁸⁾と、機械の採用ということに関して考えるべき問題は「総生産物もしくは純生産物の大小」ではなく、機械を使用することによって生産される商品が安くなるかどうかではないか、と疑問を呈している。商品が安くなりさえすれば機械の建造は「あらゆる階級の人々にとって利益となる」。このようにマカアロクが主張する根底には、そもそも機械採用による労働者排除の問題そのものが想定されていないという事情があると考えられる。機械が生産過程に導入され、それによって労働者の排除が発生したとしても、いわゆる補償説の論理によって、彼らはいずれ他の商品を生産する場で雇用されることになる、とはじめから想定されているのである。それゆえ、機械を採用することによって商品が安くなりさえすれば、「あらゆる階級の人々にとって利益となるはずで」ある、と考えたのであった⁹⁾。

続いて、マカアロクは、リカードウ『原理』第3版第31章において述べられている例解を取り上げて、その論証が不十分な点を批判しようとするのである。すなわち、「おあげになった例解は、私に理解しうる限り、あなたがそれから引きだされた異常な結論の何ひとつをも決して理由づけていません」¹⁰⁾と。そして、具体的には次のように述べる。「〔あなたは……引用者〕7,500ポンドに値する機械の寿命が1年であるか、10年、または100年であるかをおっしゃっていませんでした——しかし、もしその寿命がわずか1年であるとすれば、……それによって製造された財はその年の終りには8,250ポンドで売れなければならない」¹¹⁾。つまりマカアロクは、リカードウが『原理』第3版第31章で取り上げている機械の耐用年数が不明瞭な点について、仮に機械の耐用年数が1年だとすれば、7,500ポンドの価値をもつ機械が生産した財は（リカードウの想定どおり利潤の割合を10%としてそれを含んだ）8,250ポンドで売られなければならない。したがって、「この機械によるとより少ない服地が生産されるだろうと……〔あなたが『原理』第3

版で……引用者〕述べておられる点を私は否定します——そういう想定はまったく問題外です。もし機械の寿命がわずか1年であるとすればそれはより多くの服地を生産しなければなりません¹²⁾。すなわち、リカードウが『原理』第3版第31章で機械採用によって総生産物が減少することを述べ、その総生産物に依存して決定されると考えている雇用労働者数も減少するにちがいないと述べている点を上のように批判しているのである。つまり、耐用年数が1年の場合、総生産額は減ることは決してないと言っている。なお、ここでマカアロクは価値額で考えて生産額は減ることはないと述べているが、彼は次にみるとおり機械採用によって生産力が下がるはずはないと考えているので、物量的には総生産物は増大すると考えている。要するに、耐用年数が1年の機械を使って生産を行った場合、その生産物は価値的には減少せず、数量的には増大するはずである、とリカードウの『原理』第3版第31章での論証を批判しているのである。

一方、機械がより耐久的で、耐用年数が1年を超えるような場合についてマカアロクは次のように述べている。「もし機械の寿命が1年以上なら、それによって製造された商品の価格は下がらねばなりません¹³⁾。あるいは、「機械により大きな耐久性を与えてもその生産力が減ることはないでしょう。それは機械によって生産される商品の価格を下げるだけであり、このため機械の建造はこの上なく有益なものになりましょう¹⁴⁾」と。すなわち、機械を使った生産では、生産力が下がるわけではなく、したがって商品の価格は下がるはずである。それゆえに、あらゆる階級の人々にとって「機械の建造はこの上なく有益なものにな」るはずである。そうであればリカードウが『原理』第3版第31章で述べているような総生産物が減少するので労働者の雇用が減少せざるをえない、という論理は成り立たない、とマカアロクは批判しているのである。ただし、「もし機械の耐久性の増大につれて機械がますます生産的でなくなるなら、あなたの推論は有力になるかもしれないことは認めます——しかしここであなたは完全に沈黙なさいます¹⁵⁾、つまりそれについては何も述べていないと批判している。マカアロクは、リカードウが『原理』第3版第31章で論じた総生産物の減少から労働需要減少を導出する機械論の論理¹⁶⁾を理解できずに、総生産物が減少することを、生産性の低下、したがって商品価格の上昇という論理でのみ把握し、もしリカードウの主張通りであればそもそも機械が建造されるはずがないのではないか、という側面からリカードウを批判しようとしている。そしてまた次のようにリカードウを揶揄しているのである。「機械の導入による総生産物の減少に伴う不利益を読者に述べる以前に、そのような減少がかつて実際に起こったかどうか、もしくは、起こりうる可能性が少しでもあったかどうかを事実の点から究明なさればよかったでしょう¹⁷⁾、あるいは、「もしあなたの推論やマルサス氏のそれが十分な根拠をもっているとしたら、ラダイト禁止の諸法は、法令全書の恥です¹⁸⁾」と。

以上、この書簡でマカアロクは、機械採用によって生産性が上昇する、それゆえ生産される商品の価格は低下し、あらゆる階級の人々にとって利益であるという論理の確認と、リカードウがそれについてどう考えているか、とりわけリカードウが『原理』第3版第31章で論じている機械採用が総生産物を減少させるという論理、およびそこからリカードウが導いている労働需要が減少し、労働者階級の一部に不利益がもたらされるという主張の再考を促したかったのである。

さて、上のマカアロクからの書簡に対してリカードは、1821年6月18日付けの書簡で次のように反論している。まず冒頭で「私の本の第3版で、機械の問題にかんする意見の変更をみとめた仕方について、弁護をこころみる気持ちはありません……。私の意見の変更はすべて次の点につきます、私は以前には一国は機械によってその商品の総生産物を年々増加させることができると考えていました、しかし今は機械の使用はかえって総生産物を減少させる傾向をもつと考えています」¹⁹⁾と、自分の意見の変更点を要約している。それによると、以前は、機械を使用することによって総生産物が増加すると考えていたが、今は反対に減少する傾向があると考えようになったということ、この点に「私の意見の変更はすべて」つきますということである。そして、彼の『原理』第3版第31章で「私はなぜこのように考えるかという理由を述べておきました」²⁰⁾と。ここで、リカードは、総生産物が減少する傾向があるという考えに変わったとマカアロクに伝えているが、これについてマルサスの機械にかんする見解と自説との関係では次のように書いている。「機械にたいするマルサス氏の異議は、それが一国の総生産物をはなはだしく増加させるため生産された商品を消費できなくなる——すなわちそれらにたいする需要がなくなるという点である」、「私の異議は、反対に、機械の使用はしばしば総生産物の量を減少させることがあり、それで消費したい意向は無限であっても、購買手段の不足のため需要が減少するようになるという点です。二つの学説でこれ以上に相違するものがありえましょうか？」²¹⁾。これはすぐ前にみた、リカード宛ての書簡で、マカアロクがリカードを批判した点、すなわち機械にかんする見解でマルサスとの相違を強調していたリカードに対して『原理』第3版において見解をマルサスのそれに同調させたマカアロクが批判した点にリカードが反論したものである。上の引用中で明確に述べられているが、リカードは、機械の使用により総生産物が増加すると考えるマルサスの機械にかんする見解とは反対に、「機械の使用はしばしば総生産物の量を減少させることがあ」ることを認め、そのような場合たとえ消費にたいする意向がどれほど強くても、消費対象となる生産物が存在しないため需要は減少するようになる、と考えている。リカードは、ここでも機械の使用により総生産物の量が減少させられると考えていることが読み取れる。もちろん、そのことを『原理』第3版第31章で論証したと考えているのである。

同じ書簡でリカードは、引き続き、マカアロクの疑問に次のとおり答えている。「もし機械が、その建造以前よりも商品を安く生産しないならば、それは建造されないだろうという点は私も認めます」²²⁾と機械使用による価格引き下げの効果自体は認めるものの、だからといって機械の使用がすべての階級の人々にとって利益になるということをリカードは認めていない。機械の「建造は購買者としての……すべての階級にとっては利益となるに違いありません、しかしわれわれのあいだの問題は、それが購買者階級の人員を減少させるだろうか否かという点です」²³⁾。ここで、リカードは、マカアロクには想起できていないきわめて重要な問題を発している。機械を使用すれば商品の価格を低下させることはできる、これについてはマカアロクとリカードの間に意見の相違はない。しかし、機械使用による商品価格低下がすべての人々にとって利益をもたらすかどうか、つまり機械使用が「購買者階級の人員を減少させるだろうか否か」、

言い換えれば機械使用が労働者を排除するか否かが重要な問題なのだとすることを強調しているのである。そしてそれについて、「私は減少させるだろうと言います、なぜならそれは総生産物の量を減少させるだろうからです」²⁴⁾。ここでも前述のリカードウの論理、すなわち機械使用によって総生産物が量的に減少するという論理、が述べられている。しかも、この論理の重要性を次のように強調している。マカアロクとリカードウとの二人の間で「多少とも関心をいただくのは総生産物もしくは純生産物の大小ではないという〔あなたの……引用者〕ご意見は当をえませんが、というのは全問題はこの命題の真偽いかににかかっているからです」²⁵⁾と、機械使用によって商品価格が低下するかどうかというマカアロクが主に重視する論点よりも、マカアロクはほとんど重視しないがリカードウにとってはきわめて重要だと考えられていたのは、機械使用によって総生産物が物量的に増大するのか減少するのか、という命題だったのである。彼にとって機械使用の利益にかかわる全問題はひとえに「この命題の真偽いかににかかっている」と考えられていたのであった。

さて、リカードウは、マカアロクが前便で問いただした他の論点にも以下のように答えている。まず、機械の耐用年数を明確にしていない点の指摘にかんしては「機械の寿命は1年もつのか、10年、または100年もつのか、もし私がこれを言わなかったならば、私の主張は当然そうあるべきほど明瞭にならなかったのです。また、もしその寿命がわずか1年であるとすれば労働需要の減少は少しも生じえない、ということは……明瞭だという点も承認します、しかしたとえ機械の寿命が10年間であるとしても、同じ結果が必然的に生ずるだろうという点は認めません」²⁶⁾と答えている。ここでリカードウは、機械の寿命がもし1年ならば労働需要の減少は少しも生じえないということを認めているが、その理由を次のように説明している。「もし機械の寿命がわずか1年であるとすれば、生産された服地の価値は少なくとも以前と同じ大きさのものでなければなりません」²⁷⁾と。機械の寿命が1年であるとすればその生産物の価値は少なくとも以前と同じ価値額であるし、しかもこの書簡でも認めているように機械はその生産物の価格を低下させる、つまり生産性は上昇すると想定されているのだから、生産物量は増大すると考えられている。したがってリカードウの想定——労働需要は総生産物の物的数量によって規定される——によれば、この場合「労働需要の減少は少しも生じえない」という結論が必然的に導出されるのである。

では、機械の耐用年数が10年になった場合はどうなのであろうか。上の引用文の後半でリカードウは、「しかしたとえ機械の寿命が10年間であるとしても、同じ結果が必然的に生ずるだろうという点は認めません」と述べている。「同じ結果」つまり「労働需要の減少」が「少しも生じえない」ということはない、要するに労働需要は減少すると述べているのである。引用文の続きにおいて、その理由についてリカードウが述べていると思われる箇所を見てみよう。「それ〔＝機械……引用者〕の寿命が10年だとすれば、それよりもはるかに小さい価値が、資本の通常の利潤を提供するでしょう、なぜなら同額の資本が使用されるでしょうが、その資本のうちより小さい部分が労働の維持に用いられ、したがって生産された商品の総価値から年々より小さい控除がなされるだろうからです。この控除のあとに残るものこそ不変的に利潤を構成するものです」²⁸⁾

と。ここからわれわれが読み取れることは次のことである。耐用期間10年の機械を使用すると、（『原理』第3版第31章で論証されたように）労働雇用は減少し、機械からの商品への価値移転もかなり少なくなるので、総生産物の価値は減少するだろう。総生産物の価値が減少してもそこから控除する部分が小さくなるので、「資本の通常の利潤」は提供される、ということである。総生産額が減少しても、資本の通常の利潤は確保される。「そこに彼〔＝資本家……引用者〕が流動資本を固定資本におき替える十分な動機が存在しないでしょうか、そして彼は労働を排除しないでそうすることができるでしょうか？」²⁹⁾と述べているところからリカードウが言わんとしていることは、機械が採用されることのうちには、すでに『原理』で論証したとおり労働需要の減少は含まれる。マカアロクが問うてきていることは、そのことではなく、機械使用に伴う商品価格の低下（＝生産性の上昇）と総生産物の減少が両立するのか否かである。このように理解したリカードウは、上でみたように流動資本を使用する場合に比べて固定資本を使う場合の方が生産物からの控除が少ないので、やはり総生産物の減少は主張しうる、したがって機械の耐用年数を考慮に入れても、『原理』第3版第31章の結論は揺るがない。こうリカードウは考え、本書簡でそのことをマカアロクに詳述しているのである。結語的にリカードウは次のように書いている。「われわれはここに商品の総量が減少したにもかかわらず生産費が減じたため、商品がヨリ安くなる場合をみます」³⁰⁾と。この場合、資本家には少なくとも機械採用前の利潤は獲得できることになるので、機械使用の動機は十分に存在するのである。リカードウは続けて「機械にヨリ大きな耐久性を与えてください、すると製造業者を償うためには……〔より少ない……引用者〕生産高で十分でしょう、なぜなら固定資本のものと性能を維持するにはヨリ少ないヤード分〔＝生産高……引用者〕を犠牲にすればよいはずだからです」³¹⁾と書いている。つまり、機械が耐久的になればなるほどより少ない生産高で資本の通常の利潤は償えるのだから総生産物も減少する、したがって総生産物の数量に規定される労働需要も減少せざるをえない。機械採用以前と「同量の労働を雇用することができるのは、機械が1万ヤード〔＝機械採用以前の生産量……引用者〕の服地を生産する場合だけです、というのは年々の同量の食物や服地やその他すべての商品が生産されるのは、この場合に限られますから」³²⁾。こうして、本書簡においてリカードウは、耐用期間が長くなった場合にも言及するという進展がみられるものの、基本的に『原理』第3版第31章で論じた自説を繰り返しマカアロクに述べているのである。

上の書簡に対してマカアロクは、1821年6月21日付けで返信している。その冒頭で「あなたがマルサスに合流なさったと申した私の誤りをお許しねがいます」³³⁾と、機械にたいする見解をめぐってリカードウとマルサスとの間に実際には存在する相違を誤解したことに対し許しを請うた後、次のようにリカードウが前便の後半で述べた機械の耐用期間、生産物価格の低下、総生産物量の増減、等の間の関係について率直な疑問を投げかけている。「お手紙の中で『もし機械が、その建造以前よりも商品を安く生産しないならば、それは建造されないだろう』とお述べになられています——ところで正直に言うと、この正しい意見をいただきながら同時にあなたの他の結論へ到達することはまったく不可能なように私には思われます」³⁴⁾。マカアロクからすると、商品

の価格を安くするということは機械使用によって生産力が上昇することを意味し、それを認めるリカードウが総生産物の減少を主張することは理解できないのである。総生産物の減少を主張するならば生産力が低下すると考えざるをえず、したがって商品の価格が上昇することを主張しなければならない。しかしリカードウはそうしない。よって、「あなたの……結論へ到達することはまったく不可能なように私には思われます」と言わざるをえないのである。同様な批判がこの書簡の中に見られる。「総生産物の減少がここに存在するでしょう。しかし綿布の価格の上昇をみないでこのような〔総生産物の……引用者〕減少を生ずることが可能ですか？ 私は可能ではないと思います——ご本の中（……）のこの問題にかんする推論には私は納得しません」³⁵⁾。あるいはまた、「価格を引き上げることなしに、すなわち機械は決してそうしないとお認めになったことを為すことなしに、総生産物を減少させることは不可能のように思われます。したがってあなたの推論の基礎になっている仮説は実際は決して起こりえないという結果にならざるをえません」³⁶⁾、と激しく批判している。

このような機械が商品価格を低下させるということすなわち生産力を上昇させることと総生産物が減少するということを同時に主張するという問題点をマカアロクが追究する批判の手紙を受け取ったリカードウは、1821年6月30日付けの返信で反論している。「さて私はお尋ねします、機械がこの産業に適用された結果、労働者の状態はどうなりましょうかと。綿布の価格がどうであろうと生産量は減少するでしょう、そしてそのかわりに他のなにかの商品が以前よりも多く生産されるのではありません。このような大きな生産の減少が社会のある階級に打撃を与えないですむと考えられるでしょうか」³⁷⁾。前便まででは機械使用による商品価格の低下を認めていたリカードウであるが、この引用箇所では、「綿布の価格がどうであろうと」それよりも「生産量の減少」を前面に出して主張するようになっている。総生産物の物的数量が労働需要の大きさ、したがって「労働者の状態」に影響を与えると考えているので、後者の方をより重視していることがここでは理解できる。このことは、リカードウが少しあとで次のように書いていることから確認できる。すなわち、「機械の使用によってその国の産業の年生産物が減少することがあるという点を承認なさんと、あなたは議論を断念されるわけです、というのは年総生産物は勤労階級の雇用の減少による以外は、どんな方法によっても減少しえないからです」³⁸⁾と。結局、ここでは、機械の使用が総生産物の減少をもたらし、そうであれば労働雇用は減少する、とリカードウが『原理』第3版第31章で展開した論理が繰り返されるのである。

さて、上のマカアロク宛ての書簡が送られた後、しばらくは2人の間で機械に関するやり取りはなされなかった³⁹⁾。この論点にかんする言及が再びなされたのは、翌年1822年2月8日付けのマカアロク宛てリカードウの書簡においてである。それには「先週の月曜日に経済学クラブの会合に出席しました、——顔ぶれがよくそろい、2、3の困難な諸点を討論しました。……また機械が労働需要のうえにおよぼす影響にかんする私の意見も論議されました、けれどもこの論争にかんする一般的な意見には私はほとんど満足することができませんでした」⁴⁰⁾と、彼が『原理』第3版第31章で展開した機械にかんする考えが他の出席者に受け入れられなかった事情が述べら

れている⁴¹⁾。

さらにそのおよそ3ヶ月後（1822年5月7日付け）のマカアロク宛ての書簡が、機械にかんして言及された最後のものとなる。ここで、リカードウはマカアロクから送られてきた経済学の講義（テキスト）の中で、「われわれのあいだに少し意見の相違があるところ」⁴²⁾を指摘している。「あなたは『労働にたいする需要は国の資本の増大にともなう増大し、その減少にともなう減少しなければならない』と言われます。これは完全には正しくありません——私自身が自分の貯蓄をもって工場を建設したり蒸気機関を建造したりするかもしれません——私はこれによって私の資本を増大しましょう、しかしその翌年にはより多くの労働を雇用しないかもしれません」⁴³⁾と、資本が増大すればそれだけ労働需要が増大するという単純な比例関係を否定している。また、マカアロクが「個人の利害はけっして公共の利害に反するものではない」と書いている箇所については、「この点は賛成しません。機械の場合には、雇い主の利害は労働者のそれとしばしば対立します」⁴⁴⁾と、注釈をつけている。これなどはリカードウが『原理』第3版第31章で最も主張したかったことのひとつなのではないだろうか。最後に、次のことも指摘している。「われわれは機械の使用によって排除された労働を雇用できるはずだという主張を私は拒否します」⁴⁵⁾。リカードウは、こうしていわゆる補償説をきっぱりと否定したのである。

以上、本節では、リカードウが『原理』第3版を出版した時期以後にマカアロクとの間でやり取りした往復書簡にみられる機械にかんする言及をまとめてきた。節を改めて、本稿全体から読み取れるリカードウの見解を総括することにする。

（注）

- 1) *Works*, VIII, p.366. 邦訳412ページ。
- 2) *Ibid.*, p.373. 邦訳420ページ。
- 3) *Ibid.*
- 4) リカードウ『原理』にたいするスラッフアの序文を参照のこと。*Works*, I, p.liv. 邦訳lxxiiiページ。
- 5) *Works*, VIII, p.381. 邦訳430ページ。なお、本書簡は、マカアロクにリカードウから『原理』第3版が贈られたと推測される時期よりおよそ1ヶ月ほど経って書かれている。その間、マカアロクはリカードウ『原理』第3版を精読していたのではないかと推測できる。
- 6) *Ibid.*, pp.381-2. 邦訳430ページ。
- 7) *Ibid.*, p.382. 邦訳430ページ。
- 8) *Ibid.*, p.383. 邦訳431ページ。
- 9) 本論文（上）74-75ページ参照。
- 10) *Works*, VIII, p.383. 邦訳431ページ。
- 11) *Ibid.*
- 12) *Ibid.*, pp.383-4. 邦訳432ページ。
- 13) *Ibid.*, p.383. 邦訳432ページ。
- 14) *Ibid.*, p.384. 邦訳432ページ。
- 15) *Ibid.*
- 16) 前掲、拙稿「リカードウの労働需要論」とくに第2節を参照されたい。
- 17) *Works*, VIII, p.384. 邦訳433ページ。

- 18) Ibid., pp.384-5. 邦訳433ページ。
- 19) Ibid., pp.386-7. 邦訳436ページ。
- 20) Ibid., p.387. 邦訳436ページ。なお、リカードウの新しい機械論にかんする叙述のわれわれの詳細な解釈は、前掲拙稿を参照されたい。
- 21) Ibid., p.387. 邦訳437ページ。
- 22) Ibid., p.388. 邦訳437ページ。
- 23) Ibid.
- 24) Ibid.
- 25) Ibid.
- 26) Ibid., p.388. 邦訳437-8ページ。
- 27) Ibid., p.388. 邦訳438ページ。
- 28) Ibid., pp.388-9. 邦訳438ページ。
- 29) Ibid., p.389. 邦訳438ページ。
- 30) Ibid.
- 31) Ibid., p.389. 邦訳438-9ページ。
- 32) Ibid., p.389. 邦訳439ページ。
- 33) Ibid., p.391. 邦訳441ページ。
- 34) Ibid.
- 35) Ibid., pp.391-2. 邦訳442ページ。
- 36) Ibid., p.392. 邦訳442ページ。
- 37) Ibid., p.399. 邦訳449ページ。
- 38) Ibid., p.399. 邦訳450ページ。
- 39) ただし、リカードウは、親しい友人にはマカアロクとの往復書簡の結末を次のように報告している。「マカアロク氏から手紙をもらいましたがそのなかで彼は機械使用の効果は一国の年々の総生産物を減少させるかもしれない点を容認しているように思われます——これは問題を放棄するものと私は考えます、というのは総生産物が減少すると、労働を雇用する能力は減らなければならないからです。」(1821年7月9日付け、J.ミル宛て書簡、*Works*, IX, p.13. 邦訳14ページ。)
「マカアロクは私の機械にかんする章にたいして決定的にはげしく反対しています——彼は私がそれを認めることによって私の本を台無しにし、また私が告白している意見とそれを告白した仕方との双方によってこの科学にたいして重大な害をくわえたと考えています。この問題についてわれわれの間に2、3通の手紙の往復がありました。——最後の手紙では、機械の使用の効果は年々の総生産物の量および価値を減少させるかもしれないということを彼は承認しているように見えます。この点を譲ることによって、彼は問題を放棄します、というのは総生産物の量が減少しても労働を雇用する同一の手段が存在するだろうと主張することは不可能だからです。この問題にかんする私の諸命題が真理であることは絶対に証明可能だと思えます。」(1821年7月9日付け、マルサス宛て書簡、ibid., pp.14-5. 邦訳16ページ。)
- 40) Ibid., pp.158-9. 邦訳176ページ。
- 41) この経済学クラブにおけるリカードウの機械論をめぐる討論については、藤塚知義『経済学クラブ——イギリス経済学の展開——』ミネルヴァ書房、1973年、とくに「後編 I」を参照されたい。
- 42) *Works*, IX, p.193. 邦訳214ページ。
- 43) Ibid.
- 44) Ibid., p.194. 邦訳215ページ。
- 45) Ibid.

5. むすび

本稿では、マカアロクが「課税と穀物法」論文を書いた時期からリカードの晩年に至る時期までに二人の間でやりとりされた書簡を中心に読み解き、機械の使用が労働者階級に及ぼす影響という論点についてのそれぞれの主張を、とくに対立点に焦点を絞りがらできる限り明らかにしてきた。繰り返すまでもなくリカードは1820年秋頃に機械にかんする考えを変えた。本稿では、リカードはなぜ、どのようなきっかけで見解を変更したかという観点からではなく、変更後の見解、いわゆる新機械論の主張内容それ自体をできる限り正確に把握するという目的で多くの書簡を読み解いてきた。とくに第4節で見てきたように、リカードはその基本的な視点として、労働需要は総生産物の物的数量の大きさによって規定されること、この考えはマカアロクからどのように批判されても全く揺らぐことなく堅持していたことが確認できた。また、マカアロクからの問いかけに応じて、機械を使用すると生産力が上昇することを明確に認めていること、あるいは明確さという点ではやや難点があることを否定できない返答であったが、機械の耐用期間を考慮した場合の生産物の価値的および数量的大きさについてリカードが言及していたことも確認できた。

リカードが『原理』第3版第31章においていわゆる新機械論全体で、いったい何をどのように主張したかったのか、およびその主張内容が含む問題点を考える上で、本稿において明らかになった論点は、この問題を今後さらに深く広く追究する上で、重要な視点を提供していると思われる。たとえば、機械の生産力上昇効果と総生産物増大との関係をリカードがどのように考えていたかを究明することが、まさに真実一男氏が言われる旧機械論から新機械論への「リカードゥ『機械論』における脱皮の不充分性もしくはその二面性」¹⁾を解明する重要な手がかりになる。今後さらに検討を深めると同時に対象を広げていかなければならない。

(注)

- 1) 真実一男『機械と失業——リカードゥ機械論研究——』理論社、1959年、144ページ。

引用・参考文献

- [1] Barton, John, *Observations on the Circumstances which Influence the Condition of the Labouring Classes of Society*, London, 1817 (真実一男訳『社会の労働者階級の状態』法政大学出版局、1990年)。
- [2] McCulloch, John Ramsay, "Taxation and the Corn-Laws", *The Edinburgh Review*, Jan. 1820 (相見史郎訳「マカロック『課税と穀物法』」『経済学論叢』第19巻第5・6号、1972年2月)。なお、本論文の正式題名は本文(注)参照。
- [3] ———, "Effects of Machinery and Accumulation", *The Edinburgh Review*, March 1821 (相見史郎訳「マカロックの機械論」『経済学論叢』第19巻第1号、1970年3月)。なお、本論文の正式題名については本文(注)参照。

- [4] Malthus, Thomas Robert, *Principles of political economy considered with a view to their practical application*, London, 1820 (小林時三郎訳『マルサス経済学原理 (上・下)』岩波文庫、1968年)。
- [5] Ricardo, David, *The Works and Correspondence of David Ricardo*, edited by Piero Sraffa with the Collaboration of M. H. Dobb, Cambridge University Press, 11 vols., 1951-55 and 1973 (邦訳『リカード全集』雄松堂)。
- [6] 藤塚知義『経済学クラブ——イギリス経済学の展開——』ミネルヴァ書房、1973年。
- [7] 羽鳥卓也『古典派資本蓄積論の研究』未来社、1963年。
- [8] ———『リカードの理論圏』世界書院、1995年。
- [9] 真実一男『機械と失業——リカード機械論研究——』理論社、1959年。
- [10] 中山孝男「リカードの労働需要論——新機械論における叙述を中心に——」『東邦学誌』第38巻第1号、2009年6月。

受理日 平成23年9月30日